本のひろば

［月刊］キリスト教書評誌

December 2023 12

ISSN 0286–7001
一般財団法人キリスト教文書センター
1957年7月17日第三種郵便物認可
2023年12月1日発行（毎月一回1日発行）第792号

●出会い・本・人
「時は金なりとは？」 エンデ『モモ』再読 宮谷尚実

●特集 シリーズこの三冊！
性的マイノリティの現実と出会うなら、この三冊！ 上野玲奈

●本・批評と紹介
青山学院宗教主任会 編著 今日と明日をつなぐもの 小池茂子
エーティンガー 著／喜多村得也 訳 ドイツ敬虔主義著作集 第8巻 聖なる哲学 小友 聡
富田正樹 著 疑いながら信じてる50 佐原光児
柏木貴志 著 アウグスティヌス 出村和彦
イグナチオ・デ・ロヨラ 著／川中 仁 訳・解説 霊操 李 聖一
木村公一 著 非暴力による平和創造 寺園喜基
寺園喜基 著 カール・バルト《教会教義学》の世界 福嶋 揚
最上光宏 著 命に通じる道 佐々木潤
岩本遠億 著 神はあなたの真の願いに答える 島先克臣
松下景子 著 語らいと祈り 太田和功一
柴崎 聰 著 詩集 文脈に立つ短剣符 並木浩一
大島 力、川﨑公平 著 聖書の祈り31 加藤常昭
及川 信、伊藤慶郎、ハリン・イリヤ、小野貞治 著／及川 信 監修 日本正教史 鈴木範久

既刊案内
書店案内

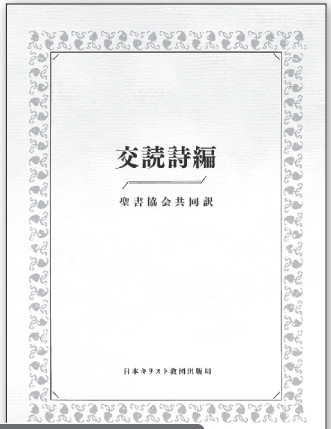
日本キリスト教団出版局 〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18 TEL03-3204-0422 FAX03-3204-0457
e-mail eigyou@bp.uccj.or.jp ホームページ https://bp-uccj.jp《価格10%税込》

新しい聖書翻訳「聖書協会共同訳」に準拠した交読詩編、待望の刊行！

交読詩編 聖書協会共同訳

＊単色版のみの販売です

『交読詩編　聖書協会共同訳』編集委員会 編



「聖書協会共同訳」でも特に名訳の評判が高い詩編。その全150編を、主日礼拝において、司式者と会衆が心を合わせて朗読できるように工夫をこらした書。主日以外の日にも、本書を日々持ち歩いて、詩編に親しもう。 ◆B6判 ソフト上製・176頁・定価1,650円

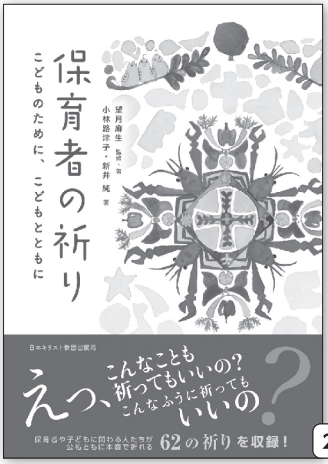
2023年11月24日刊行予定

本書の刊行を記念して、
日本聖書協会と共同で特典付きフェアを実施！

［キリスト教専門書店限定］

教会が対象の『聖書　聖書協会共同訳』と本書を各10冊以上ご購入で特典が適用されます。特典は、10冊ご購入ごとに1冊献本など、３つの特典がございます。詳細は下記アドレスまたはQRコードよりホームページの案内をご覧ください。

フェア期限：2024年5月31日　https://bp-uccj.jp/news/n54237.html



保育者の祈り

こどものために、こどもとともに

望月麻生 監修・著
小林路津子／新井 純 著

キリスト教保育の現場は、キリスト者に限らず、多くのノンクリスチャンの働きによって支えられている。そうした祈りの習慣のない保育者などの関係者が公私ともに本音で祈れる62の祈りを収録。

2023年11月24日刊行予定　◆B6判 並製・96頁・定価1,320円

出会い 本 人

「時は金なりとは？」エンデ『モモ』再読

――宮谷尚実

これまで出会った本や人を振り返る機会を今回いただき、本棚を物色した。大学時代の恩師、速水敏彦先生の『新約聖書・私のアングル』をまずは手に取り、表紙を開いたその瞬間、男性用の腕時計がおおらかに描かれたハガキが目に飛び込んできた。先生が定年後に初めて描かれたというその絵手紙には、割り箸ペンのユーモラスな筆跡で「時は金なりとは？」と書き添えられている。最後の大きな疑問符に、先生のしなやかな批判精神を懐かしく思い出す。

この絵手紙から四半世紀が経つが、師からの問いかけには答えを出せないままだ。途方に暮れて本棚に視線を戻すと、ミヒャエル・エンデの『モモ』が目に留まった。初めて手にしたのは高校生の頃、それから折に触れ読み返してきた。聖書はもちろんのこと、大切な本を繰り返し読むのは良いものだ。心のありようによって響くことばや見える景色が変わる。若い頃には読み飛ばしていた箇所に立ち止まるようにもなる。コロナ禍の日本で『モモ』ブームが巻き起こったが、私もオンライン授業動画作りに明け暮れた孤独のなかでふたたび読み、対面の人間関係の大切さを再認識した。いまならどんな感想を抱くかと思い、読み直してみた。

無駄な時間を「時間貯蓄銀行」に預けるよう灰色の男たちに唆された人々が掲げるスローガンがまさに「時は金なり――節約せよ！」だった。時間を節約して稼ぐことのみに注力する人間の生活はみるみる荒んでいく。切り詰められるのは、友情や愛情から心をこめて他者と分かち合う時間だからである。だが、本当はこうした時間のなかにこそ、自己の内面に出会いと決断の時〈星の時間（シュテルンシュトゥンデ）〉、すなわちカイロスが生じる。「時間とは生きるということ」というエンデのメッセージが今回の再読でひときわ心に染みた。せわしない自分を反省。

「ね？」とウインクする恩師のはにかんだ微笑みが心に浮かぶ。

（みやたに・なおみ＝国立音楽大学音楽学部教授）

▼シリーズ　この三冊！

性的マイノリティの現実と出会うなら、この三冊！

上野玲奈（うえの・れいな：日本基督教団部落解放センター主事）

①『肉屋を支持するブタにならないためのクィア・マガジンOVER vol.1』（２０１９年）
②『イエスの意味はイエス、それから…』カロリン・エムケ著（２０２０年）
③『クイア・レッスン　私たち教会がＬＧＢＴＱから学べること』コディー・サンダース著（２０２１年）

今年はキリスト教書店大賞に、私も執筆させていただいたＬＧＢＴに関する本が選ばれました。日本の教会でも、ＬＧＢＴＱ＋と出会う機会がぐんと増えたのではないでしょうか。それでもまだ出会ったことがないという方々のほうが多いかもしれません。実際私自身も日常生活でＬＧＢＴ仲間と一緒にいる時間や会話する機会はほとんどありません。だからこそ本が必要だといつも思います。生身の人間との関わりは何にも代えがたいですが、文字を通しての出会いもまた確かな出会いです。今回は、より深く当事者の現実と出会いマジョリティが気づく経験を期待できる三冊を紹介させていただきます。

特集「STONEWALL 50 人権！差別！ＬＧＢＴ！」の最初に掲載されている北村雄二の文章、「作用と反作用の長き派手やかな道―ストーンウォール五十周年（上）」です。読み始めるとすぐに、日本のクリスチャンが関わった事件について書かれていることに気づくと思います。１９９０年、「動くゲイとレズビアンの会」（通称・アカー）が東京都の研修宿泊施設「府中青年の家」を利用した際に差別・嫌がらせを受けました。ところが、嫌がらせをした側ではなく差別されたアカーのほうが施設利用を拒否されました。１９９１年アカーは東京都を提訴し１９９４年に一審で、１９９７年に控訴審でも勝訴を勝ち取りました。日本で初めて同性愛者差別に関して争われた裁判でした。果たして、この裁判の原因になった差別・嫌がらせ行為の一部をしてしまったのがキリスト教団体の人々だった事実を知っているクリスチャンが、どのくらいいるでしょうか。この時、旧約聖書のレビ記の御言葉が読み上げられたそうです。目の前にいる相手が同性愛者たちだとわかっていて「女と寝るように男と寝るものは、ふたりとも憎むべきことをしたので、必ず殺されなければならない」という箇所を読んで聞かせたのです。聖書を、同性愛者を断罪するために恣意的に用いた重大な差別・嫌がらせ事例の一つです。この事件に関わったのが自分の属する教団ではなくても、私たちは差別をしてしまった宗教（団体）として日本社会に知られているのだということを自覚しなければならないと思います。自分たちの加害性を自覚するために、この北村の文章は多くのクリスチャンに読んでもらいたいものです。畑野とまとの「ストーンウォールの真実」では、アメリカのストーンウォール蜂起に至る背景とともに日本の状況も語られています。鈴木賢「ＬＧＢＴ＋の生きづらさの根源にあるもの」では、自治体のパートナーシップ制度や自身が受け持つ大学生の声も紹介されています。全体として、アメリカや他の海外の状況を紹介しつつ日本社会における性的マイノリティの現実が見えてくるような文章が掲載されています。各文章のなかに、差別への鋭い指摘とプライドを持って生きてきた、そして今もなお生き抜こうとしている当事者たちのしなやかな強さと優しさが表れているように感じます。日本に生きる性的マイノリティと紙面上で出会う経験ができる雑誌です。

『イエスの意味はイエス、それから…』の著者であるカロリン・エムケは西ドイツ出身、世界各地の紛争地を取材し執筆してきたジャーナリストです。前著書『憎しみに抗って』で、２０１６年のドイツ図書流通連盟平和賞を受賞しました。本書の中でご自身の立場を「女性を愛し、女性に欲望を抱く者」と明らかにしています。私自身もオープンなレズビアンとして生きていますが、同じ立場の人が書いた文章を読む機会はそれほど多くありません。最近は一般出版社のみならずキリスト教出版社からも、性的マイノリティ当事者の著作も増えてきました。ただ、出版された性的マイノリティ関連本のテーマはたとえば「教会／キリスト教と同性愛」だったり、「聖書とＬＧＢＴＱ」だったり、あるいは当事者のセクシュアリティをテーマにしたエッセーやＬＧＢＴＱに関する法律や社会

状況や教育の現場での状況などが多いように思います。しかし、この本は主題が性的マイノリティど真ん中ではありません。２０１７年世界中に広まったＭｅ Ｔｏｏ運動を契機に、虐待やセクシャル・ハラスメント、権力、差別などについて語られています。自身や知人が経験した出来事だけではなく、あの時私は気づいていなかったのだという想像力の欠如の告白もなされます。２０１８年にベルリンの劇場でエムケが行った朗読の内容を本にしたものです。

同性愛者であるエムケが自分の経験を語る部分を引用します。

それになにより、同性愛者である私に対しては、昔もいまも、悲しくも有利な誤解がある。

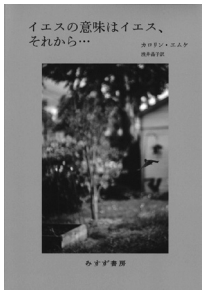
つまり私は、男性の同僚たちから同等の存在と見なされ、だが同時に、男だと見なされるのだ。新聞社には女性蔑視の風潮が強く、まさにそれゆえに、私は男性たちから特別な敬意をもって扱われてきた。ほかの女性たちほど見下されることがなかった――なぜなら、私はそもそも「本物の」女だと見なされていなかったからだ。それは私にとって、さまざまな重荷からの解放であると同時に、別の重荷を背負うことでもあった。

周囲が無意識に女性同性愛者をどう解釈しているのかが、この分析で明らかにされています。ドイツの新聞社ではこのような状況だったようですが、日本ではどうでしょうか。さまざまなテーマについて語りながらも、女性同性愛者の視点が要所々々で記されています。非常に重いテーマを扱っていますが、性的マイノリティについて一所懸命学ばなくては！　という肩肘張った力を抜きつつ、彼女の視点を通じて女性同性愛者やＬＧＢＴＱの視点を思い巡らすことができるでしょう。

最後に、監修させていただいた『クイア・レッスン』をおすすめしたいと思います。著者のコディー・サンダースはバプテスト系教会の牧師で大学のチャプレンで、ゲイ男性です。教会が性的マイノリティを話題にする時、どうしても「について」学ぶという姿勢になってしまう、対象として学ぶのではなく、むしろ、教会という非常に生きづらい場にあってなお信仰を捨てず、誠実な関係性を続けながら生活しているＬＧＢＴＱ個々人のその生き様「から」学ぼうという呼びかけが、まずなされます。１章から６章までそれぞれが「レッスン」になっており、関係性、共同体、信仰、愛、そして暴力、赦しのレッスンで終わります。アメリカ社会とキリスト教における性的マイノリティの歴史も記述されます。特におすすめなのはマイクロアグレッションや教会のあり方についての部分です。マジョリティである異性愛者やシスジェンダー（自らの性自認と生まれた時の体の性が一致する人）が性的マイノリティを受け入れてあげるために、かれ・かのじょたちを理解しよう（＝理解してあげよう）、マイノリティの苦しみを知ろう（＝知ってあげよう）という態度を続けていては、いつまで経っても変わることはできません。マジョリティ側が持つマイノリティへの偏見に気づくために、この本を通してのレッスンはとても役に立つはずです。

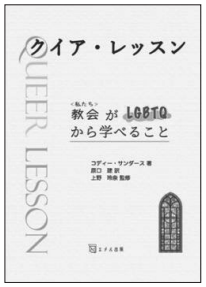
『肉屋を支持するブタにならないためのクィア・マガジン OVER vol.1』

オーバーマガジン社
2019 年 5 月 24 日
A5判 141 頁
1,320 円



『イエスの意味はイエス、それから…』

カロリン・エムケ：著
浅井晶子：訳
みすず書房
2020 年刊
四六判 144 頁
3,080 円



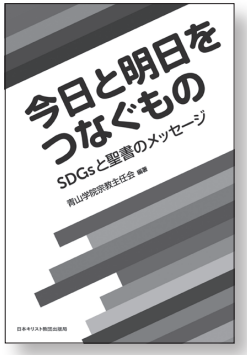
『クイア・レッスン――私たち教会が LGBTQ から学べること』

コディー・サンダース：著
原口　建：訳
上野玲奈：監修
エメル出版
2021 年刊
四六判 289 頁
1,980 円

†本・批評と紹介

キリスト教を生きる力とするために

〈評者〉小池茂子



今日と明日をつなぐもの
SDGsと聖書のメッセージ
青山学院宗教主任会編著

本書は、青山学院宗教主任会が編纂したものである。私立学校の使命は建学の精神に基づく教育を行い、その精神を体現した人を世に送り出すことにあるといえる。「青山学院の教育方針」には、「キリスト教信仰にもとづく教育をめざし、神の前に真実に生き　真理を謙虚に追求し　愛と奉仕の精神をもって　すべての人と社会とに対する責任を　進んで果たす人間の形成を目的とする」とある。

しかし、キリスト教主義学校に在籍する者の多くがキリスト教の信仰に至っていないという現実がある。「生徒・学生たちに贈るメッセージ集」（三頁）と「まえがき」にあるように、本書のねらいは、同学院に連なる人たちがにわかに信仰には至らずとも、日常の教育・研究や学内の礼拝を通じてキリスト教のメッセージを身近なものとして受けとめ、自身の生き方を考えることにあろう。

内容は「はじめに」「Ⅰ　聖書で読みとくSDGs」「ⅡSDGsと聖書のメッセージ」「あとがき」からなっている。

Ⅰでは、SDGs（Sustainable Development Goals、持続可能な開発目標）の一七の目標とそれに関連する聖書箇所が紹介され解説が加えられている。今日だれもが耳にして授業でも取り上げられているSDGsの目標を聖句に結びつけて解説することで、聖書が語るメッセージの現代化、生活化を図り、生徒・学生たちに聖書を身近なものとする点に本書の特徴と意義を見出すことができる。同時に、気がかりな点もある。Ⅰの冒頭には、SDGsに明示されている現代的課題について「必ずしも古代世界の問題とぴったり重なるわけではありませんが、聖書のメッセージの中に同じ価値観や願望を見出すことはできます」（九頁）とある。だが、ジェンダーの問題をはじめ、聖書の中には今日の価値に照らすと妥当とは言えない記述、時代的な限界を含む記述が存在することを明言したほうが、読み手は聖書を一層身近なものと感じられるのではないだろうか。

Ⅱでは、学内行事（グローバルウィーク）で、すべての礼拝がSDGsとの関連から語られた折の礼拝説教が紹介されている。幼稚園から大学まで、宗教主任によるSDGsに掲げられた目標を切り口とした説教は、神が創造された世界・私たちが生きる今日の世界が人間の欲望や罪によって持続可能性を危ぶまれていること、その中で私たちは単に悲嘆や絶望、黙殺や無関心、自己を守ることだけに終始するのではなく、神（イエス）がこの世と人を愛されたように、隣人を覚え、社会や隣人のためにできることが私たち一人ひとりにあるのではないかと問いかける。使徒パウロはイエスを「キリスト（救い主）」として信じた者が、内的にどう変えられていくかを絶えず問題にした。キリスト教が生きる力となっているか、隣人のために何かしているか……。各説教では、聖書が語る問い「あなたはどう考え、どう生きるか？」が、今を生きる園児・児童・生徒・学生に身近な言葉として語られている。

学校という教育の場で、在籍している生徒・学生たちにいかにしてキリスト教のメッセージを届け、建学の精神を体現した人を育てていけばよいか。今日の日本におけるキリスト教主義学校が抱く課題について、果敢な挑戦とヒントを本書の中に見出すことができる。

（こいけ・しげこ＝聖学院大学学長）

（四六判・一二八頁・定価一四三〇円・日本キリスト教団出版局）

POSTCARD BOOK
森のなかまたち
池谷陽子 絵

ポストカード16枚
定価1320円

長年『季刊 教師の友』の表紙を飾り、子どもたちに愛されてきた池谷陽子さんの「森のなかまたち」が絵はがきになりました。春、夏、秋、冬の1年を通して、熊さん、羊さん、鳥さん、うさぎさんなど森のなかまたちをいきいきと描きます。

1冊でわかる聖書66巻＋旧約続編
小友 聡
木原桂二

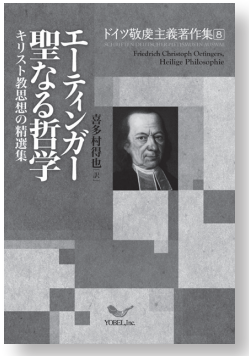
旧約聖書39巻と新約聖書27巻、さらに旧約聖書続編の各書のあらすじやポイントを簡潔に紹介。各書が何を語っているのかを大まかに掴むことで、聖書全体のメッセージについてより理解が深まる。『信徒の友』連載を単行本化。
四六判 並製・192頁・定価2200円

日本キリスト教団出版局
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3204-0422 FAX 03-3204-0457
E-mail eigyou@bp.uccj.or.jp《価格10%税込》
https://bp-uccj.jp

†本・批評と紹介

ドイツ神学思想の底流を流れる白眉の著作集

〈評者〉小友　聡



ドイツ敬虔主義著作集 第8巻
聖なる哲学
キリスト教思想の精選集
エーティンガー著
喜多村得也訳

本書は18世紀ドイツのキリスト教思想家、フリードリヒ・クリストフ・エーティンガーの著作のアンソロジー（精選集）である。書名『聖なる哲学』はエーティンガー自身の思想の自己理解であり、聖書を基盤とした洞察であることを示す。評者は本書の書評を頼まれた時、正直に言って、少々うろたえた。旧約聖書学を専門とする者には近世の哲学書の書評は荷が重かったからである。しかし、18世紀ドイツの啓蒙主義哲学に対するキリスト教会からの建設的で考え抜かれた神学的発言に出会い、多くの刺激と示唆を得た。

本書の著者エーティンガーは、シュペーナーの敬虔主義の流れに属する、ルター派教会の牧師である。グノモンの著者ベンゲルの弟子であり、またカントの論敵スウェーデンボルクの影響を受けた神秘主義の思想家としても知られる。エーティンガーは当時の啓蒙主義哲学に対峙し、聖書に基づいてルター派の福音主義的思想を展開した。このように紹介すると、かなり難解な思想家のイメージがあるが、そうではない。たとえばローズンゲンで知られるヘルンフート兄弟団の信仰覚醒運動と呼応した、聖書的福音を説く説教者と言ってよい。エーティンガー曰く、「聖なる哲学は、いのちを与える霊の道具である。」「聖書を説明することが最高の哲学である。」（34頁）

本書はエーティンガーの著作から重要なものを抜粋し、一冊に纏めたものである。目次からわかるように、神論、三一論、キリスト論、贖罪論、信仰論と聖化論、終末論という内容で神学思想が紹介される。また、十字架論を展開する公開説教が収録されている。注目したいのは、「アントニア王女の教示画」と題される絵画解説であり、ユダヤ教神秘主義（カバラー）に類比されるキリスト教神秘主義によって図版が見事に謎解きされる。18世紀のキリスト教敬虔主義がなんとユダヤ教神秘思想と親密な関係があったという事実に評者は衝撃を受けた。

本書の紹介として、翻訳者・喜多村得也氏に触れなければならない。喜多村氏はドイツ文学者であり、無教会の小平福音集会の指導者。金子晴勇先生の勧めでエーティンガーの翻訳に取り組まれた。本書翻訳に心血を注がれ、完成するも出版を待たずに今年1月に79歳で天に召された。その意味で、本訳書は喜多村氏の「白鳥の歌」である。あとがきには、「私はエーティンガーの信仰はなんと素晴らしいものであるか、魅せられた」と記されている。喜多村氏のお嬢さんが、病床でこのあとがきを口述筆記したそうである。

18世紀後半はカントによってドイツ観念論が花開いた時代である。この時代にエーティンガーという特筆すべき霊的なキリスト教思想家がいた。評者はかつてカント哲学に魅了されたが、実践理性の要請にすぎぬ「神」に心を傾けて祈れないという壁にぶつかった。今回、書評のための閲読とはいえ、エーティンガーに出会い、カントの限界にあらためて気づかされた。本書は近世のドイツ神学思想を知るために必須の書である。なお、エーティンガーの著作については『自伝』（第7巻）の翻訳も刊行される。

（おとも・さとし＝東京神学大学教授・中村町教会牧師）

（四六判・二八八頁・定価二二〇〇円・ヨベル）

神に栄光・地に平和

クリスマス説教集

久野牧
HISANO Nozomu

神の御子イエス・キリストの誕生は，わたしたちの新しい誕生のとき．それは喜びの知らせを聞くことからはじまる．神からの慰めの言葉は今も新しく響く．

四六判・並製
定価 3,520［本体 3,200＋税］円
ISBN978-4-900666-53-5

株式会社　一麦出版社
札幌市南区北ノ沢３丁目 4-10
TEL（011）578-5888
http://www.ichibaku.co.jp
携帯　mobile.ichibaku.co.jp

†本・批評と紹介

イエスの語りかけに重なる信仰理解への応答

〈評者〉佐原光児

疑いながら信じてる50
新型キリスト教入門　その1
富田正樹著

「わたしは疑いながら信じています」との一文で始まるキリスト教入門書は、新鮮だ。

本書は、長く聖書科教員としてキリスト教学校に勤めながら、教会の代務者も務める著者が、50のテーマ（問いや呟き）を掲げて持論を展開していく。テーマには、「いまさら神なんて人間に必要なのか?」や「教会は世の中の何に役立っているのか?」など、クリスチャンをドキッとさせるものがある。また、恋愛や不倫などパートナーシップに関わるものや、セクシュアリティ、災害や疫病、戦争、救いや永遠の命など、テーマは多岐に渡っている。

各テーマは、著者の探究心に因るものだろうが、読んで感じたのは、その背後にある「対話」の存在である。それは率直な、そして時には我々を試す中高生からの問いかけで始まったり、また、本を読んだ後の内省や、心を許せる仲間との雑談、さらには意見を異にする人との激論だったかもしれない。それらは対面で、時にはオンライン上で交わされたであろう。そうした問いや対話が、しっかりとした学びに基づいて、分かりやすい言葉で表現されている。

わたしは、これまで3つのキリスト教学校に勤め、高校生と大学生、そして同僚からの問いに放り込まれてきたが、本書は、そうしたキリスト教学校や教会、特に若者を相手にする人にとって価値があるように思う。

大切なのは、著者が主張するように、本書はキリスト教の公式見解や正解を示すものではない、ということだ。本書の魅力は、「自分だったらどう受け止め、答えるだろうか」と考えさせる余地と導きを備えている点である。各テーマに対して導き出す結論は、読者によって異なるだろう。しかし、この50の問いを、それぞれの場で向き合う若者たちに重ねて深めることが出来れば、それは自身の信仰理解を促すだけでなく、彼ら、彼女らに語りかける柔軟な言葉の発見に繋がるはずだ。そしてこの作業には、「問い」や「疑い」が必要不可欠である。

例えば、「まえがき」部分において、著者は「疑うという行為は、私にとっては信じられるものを見つけるために不可欠な行為です。信じたいから疑うのです」と書いて、疑うことを肯定的に描く。わたしも学生たちに、信仰やカルトについて話す時には、「信仰には問いが必要」と加えるが、その時念頭にあるのは聖書の登場人物たちである。その人たちは、人生の危機や理不尽さに放り込まれる時、存在をかけて「なぜですか」と神に問いかける。そして面白いことに、聖書では、たびたびその問いを通して今までになかった新たなことが示される。

しかし、こうした問いや疑いは不信仰で、信仰には相応しくない、とする人たちも確かに存在する。わたしが、そうした信仰理解を示す人たちに対して危うさを感じるのは、一見、神への従順を説きながら、実は神の言葉を代弁する自分たちへの絶対服従を求めているように映るからだ。

しかし、本書は、問いかけたり、疑いを抱えて核心に迫ろうとする人々の背中を、無理やりではなく、優しく押し出してくれるだろう。そこに、人生で悩み、問いながらも、前へと進もうとする人々に向けられたイエスの「安心して行きなさい」との語りかけが重なるのである。

（さはら・こうじ＝桜美林大学准教授・大学チャプレン）

（四六判・一九二頁・定価一五四〇円・ヨベル）

新刊

聴 きく 議長室から

大柴 譲治 著
日本福音ルーテル大阪教会牧師

●四六判並製　135頁
定価 1,100円

著者が日本福音ルーテル教会総会議長在任中（5年間）のJELC機関誌『るうてる』のコラム「聴 議長室から」を収録した。コロナ下による変則的な任期の中で「『神のみ言葉に聴く』という姿勢を貫くことができたことが、私自身を支えてきました（あとがきより）」。スピリチュアルケアの専門家による、「神の霊による魂のケア」の記録であり、コラージュセラピーとも呼びうるであろう。

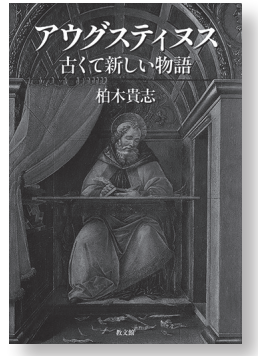
ISBN978-4-86376-098-1

LITHON［リトン］
〒101-0061 千代田区神田三崎町2-9-5-402
☎ 03-3238-7678 FAX 03-3238-7638

†本・批評と紹介

古代末期の教会人の肉声を伝える「歴史小説」の秀作

〈評者〉出村和彦



アウグスティヌス
古くて新しい物語
柏木貴志著

本書は、古代末期、教会人・牧会者として生きたアウグスティヌスの最晩年の日々（四三〇年八月）と若き司祭としての活動（三九一―三九五年）を中心にその生涯を生き生きと浮かび上がらせる「歴史小説」の秀作である。

物語第一部は、アウグスティヌスの弟子であり長年の同僚であったポシディウス――彼は現存する伝記『聖アウグスティヌスの生涯』の著者でもある――の目に映った臨終の床に就く師の姿から説き起こされ、三九一年司祭叙任時へと場面をフラッシュバックする。ここでは、回心に至る彼の心の葛藤も、三七歳のアウグスティヌス自身による回想の中で印象的に示されている。

第二部は、三九一年から三九五年の補佐司教叙任までのヒッポの若き司祭アウグスティヌスの活動を同時期の著作や書簡・説教を典拠に的確に記述され、初期キリスト教思想史的にも十分首肯し得る若き司祭アウグスティヌスその人の生きた姿を提示してくれる。旧友ホノラトゥスを配して描かれるマニ教指導者フォルトゥナトゥスとの対論、色や臭いまで伝わる洗礼式の描写、「偉大なる謙遜」、「愛すれば愛するほど」、「愛は赦すこととして姿をあらわす」、「神の恩恵は愛と共に旅を続ける」という小見出しのもとに現実の「ドナトゥス派との対峙」が描かれる第二部は圧巻である。ドナトゥス派ティコニウスの立ち位置が正確に記されていることも重要である。

終部では、陥落間近のヒッポでの最晩年のアウグスティヌス図書館の模様に引き戻され、ペラギウスとの残念なすれ違いと、臨終の床でひたすら祈るアウグスティヌスが照らし出され、若き日の『主の山上のことば』説教を再び味わいつつ本書を閉じることになる。

有名なアウグスティヌスの『告白録』には三九七年の司教の現在とその十年前の回心とその翌年の母の死までの前半生の事象が記されているが、その後故郷アフリカに帰って「神の僕」の生活を始めた様子やたまたま訪れたヒッポで突然司祭に挙げられた子細などについては教えてくれない。本物語はその間の彼を知りたいという読者の飢えを癒してくれる待望の書である。

特筆すべき点として、ヒッポの前任司教ワレリウスがアウグスティヌスを教会人として立たせるのに配慮を怠らなかったことや、北アフリカの全教会の監督者であるカルタゴ司教アウレリウスとの補完的関係が丁寧に描かれていることがある。アウグスティヌスは神学的に孤高の境地にあったが、しかし多くの友人を持ち、決して孤立した存在ではなかった。その中で特に、タガステの神の僕たちの「家」とヒッポ教会の庭園の修道院をつなぐ存在としてポシディウスを配し、本書は、彼の目を通して、司祭叙任の時から終焉に至るその生涯を俯瞰しつつ、アウグスティヌスがいかなる人であったかを描くことに成功している。

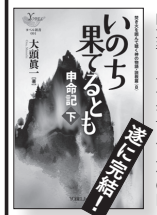
この「古くて新しい物語」は、「自分の弱さを率直に開け広げることのできる偉大な教父、繊細な魂をもって生きた信仰者、目の前にある人を神の民として愛した教会人アウグスティヌス。その人に、わたしは友人に覚えるものに似た親近感を覚え、その言葉に励まされてきた」と言う著者ならではこそ語り得た快挙であり、我々に与えられた大きな恵みである。

（でむら・かずひこ＝岡山大学特命教授）

（四六判・二二四頁・定価三〇八〇円・教文館）

ヨベルの新刊／既刊案内

大頭眞一 焚き火を囲んで聴く神の物語・説教篇 全8巻
いのち果てるとも 申命記・下
四六判・二三二頁・一二〇円



嗚呼、かくも人間臭い神さまと共に、世界の破れを繕っていけ、だなんて！
神に愛されていないのでは…と悩み苦しむ現代人に向かって「私もあなたに愛してほしい」と、妬むまでに懇願する聖書の神を指し示してきたパスター・オオズ。人一倍の渇愛ボクシだからこそ（？）感得できた申命記の〈読み〉も、いよいよ最終章へ！

大頭眞一 焚き火を囲んで聴く神の物語・説教篇 全8巻完結
❶ アブラハムと神さまと星空と［創世記・上 在庫僅少］
❷ 天からのはしご［創世記・下］
❸ 栄光への脱出［出エジプト記 在庫僅少］
❹ 聖なる神の聖なる民［レビ記 在庫僅少］
❺ 何度でも何度でも何度でも愛［民数記 在庫僅少］
❻ えらべ、いのちを［申命記・上］
❼ 神さまの宝もの［申命記・中］
❽ いのち果てるとも［申命記・下 最終回配本］

新書判・平均二二四頁
各巻定価一二〇円

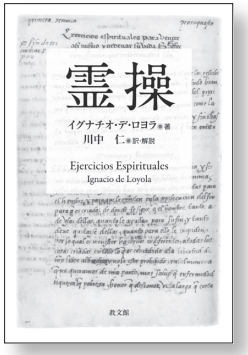
好評発売中！

ヨベル *YOBEL Inc.* info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-1-5F
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
出版の手引き／呈（税込）

†本・批評と紹介

「霊の体操」の手引書としての『霊操』

〈評者〉李　聖一



霊操
イグナチオ・デ・ロヨラ著
川中　仁訳・解説

『霊操』は読むための書物ではないとよく言われる。読んでもよく分からないという声も聞く。そうでありながらも、キリスト教の霊性や神秘主義思想を研究しようと思えば、必ず触れなければならない書物でもある。その方面の研究に興味がある人は、訳者川中仁師の「解説」からお読みになるのがよい。訳書の原本テキストそのものの、直筆と言われながらも、複雑な層から成り立っていること、それを踏まえた上での訳業の困難さを知ることができるであろう。また、各ページ末に施された注は、イグナチオ自身の体験を多少なりとも理解する手がかりとなる。

『霊操』が訳出されるのは今回で四回目であるが、基本的には、「霊の体操」の手引書として使用されるためであったと言ってよい。もともと『霊操』ができあがったのも、イグナチオ自身の霊的体験と霊的な助けを求めた人々と実際に対話して得た実りから生まれ、霊操指導をするために書き留められたものだからである。

それゆえに、『霊操』を理解しようとすれば、実際に「霊の体操」を行ってみるほかはない。しかも、一人で行うのではなく、「霊操」をよく知る人（指導者）を見つけ出し、「霊の体操」を行いながら、自分の心の中で生じる「霊の動き」を体験し、それがどのようなものであるかを、その指導者とともに語り合うことが大切になってくるからである。

『霊操』には、「霊の体操」の仕方と手順、それに従って行うことによって生じてくる心の動きの正体が何であるかを知るための基準が書き記されている。

『霊操』は公式には一五四八年に教皇勅書によって認可されたが、それ以前から、そして今日にいたるまで、多くの人々が霊的生活を深め、神との出会いを体験し、信仰生活をまっとうするために大きな力となったのは、実際に霊操を行ったからである。イグナチオの最初期の同志であったフランシスコ・ザビエルやペトロ・ファーブル、現代においても、イエズス会総長としてイエズス会刷新を導いたペドロ・アルペなど、多くのイエズス会士を導き、また、教皇や司教、司祭、そして信徒にいたるまで、カトリック信仰に生きる人々の信仰生活を深め、生きることに大きな影響を与えたのである。また、キリシタン時代においても、一五九六年に天正遣欧使節が持ち帰った印刷機によって出版された『霊操』は、迫害にさらされたキリシタンたちの信仰生活を支えたことは特筆すべきであろう。

今回の川中訳は、イグナチオの直筆部分を最大限に活かし、イグナチオ自身の体験から生まれた表現を味わうことができるように、そして、実際に霊操をするうえでの手引書としての役割を果たすことができるように工夫されたものであると評価してよい。

その上で、今後、霊操指導に従事する人は、この訳を手にしながら、人々の霊操体験を豊かにすること、それを通して、さらに、使いやすい手引書となるように助言することができればよい。また、霊操する人は、この訳書を手掛かりにして、霊操体験を深め、信仰を生き抜くことができればと願う。

（り・せいいち＝上智学院カトリック・イエズス会センター長）

（四六判・一七六頁・定価一一〇〇円・教文館）

ヨベルの新刊案内

ジュセッペ三木一　佐藤弥生訳　松島雄一監修　師父たちの食卓で3

百年間のカウントダウン　創世記を味わう　第5章〜第7章

A5判・144頁・一六五〇円

ノアの物語に「いま」を読む！

「危機的で終末論的」と多くの人が意識の深層で感じ取っている現代、悪と暴虐が世に満ちること、そこからの魂と世界の救済について、聖書は何を語り得るのか。創世記第5〜7章を解明する——。好評「師父たちの食卓で」シリーズの第3弾。

李信建　こどもの神学

朴昌洙訳　神をこどもとして考えられないか

四六判・328頁・予価二二〇〇円

神が厳父ではなく、こどもだったら、キリスト教もまったく違ったものになる！

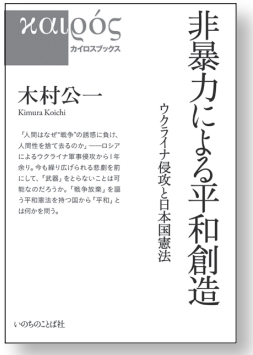
子どもたち、とりわけ、暴力や虐待にさらされてきた数え切れないほどの子どもたちにとって、神とは一体何ものなのか？現代韓国社会の最前線に立ち尽くしての根源的な問いの果てに一人の神学者が辿り着いた、「**神こそ、こどもである**」という思想、その斬新なる全貌を初邦訳。

ヨベル *YOBEL Inc.* info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-1-5F
TEL03(3818)4851　FAX03(3818)4858
出版の手引き / 呈（税込）

†本・批評と紹介

ロシア・ウクライナ戦争の現実の中で平和憲法が問う

〈評者〉寺園喜基



非暴力による平和創造
ウクライナ侵攻と日本国憲法
木村公一著

「客観性に逃げるな、主観性に責任を持て、という言葉がありますよ」、こう教えてくれたのは著者の木村公一氏である。では著者自身はこの言葉をどう実践しているのか。それについては明白である。

著者が責任を持つ視座は「虐げられた人々」への関与である。破壊と殺傷の犠牲者たちや平和的生存権が剥ぎ取られた人々の叫びへの関心である。これには理由となる幾つかの経験があった。小学生のころ祖父から日露戦争での地獄体験を聞いたこと、また宣教師として派遣されたインドネシアの神学校で十七年間教鞭を取っていた間に、旧日本軍の従軍慰安婦問題やスハルト独裁政権打倒運動に関わったこと、またその間アジア・バプテスト平和委員会の委員長として働いたこと、そしてまた、その後に「人間の盾」としてバグダッドで経験したこと、などである。

本書は二部から構成されている。第Ⅰ部ではウクライナ侵攻に、第Ⅱ部では日本国憲法に焦点が当てられる。だが、この二つを二元的に分離して理解してはならない。むしろ相互に作用し合っている。そして、ロシア・ウクライナ戦争の現実の中で日本の平和憲法が何を問いかけているのか、ということを聞こうとしているのである。憲法を、大人が肩越しに子どもの作文を見て「どれどれ」と手を加えようとするように読むのではなく、憲法という学校の生徒として、憲法が問いかけていることを現在の平和ならざる状況との関連で聞こうとしているのである。

内容を見てみよう。第Ⅰ部は「なぜ『軍事侵攻』は起こったのか」と題されている。ウクライナとロシアの戦争が十八世紀以降に今回を含めて五回起きていること、そこには背景として宗教地政学的な歴史があることが述べられ、また、プーチンとロシア知識人たちに「ウクライナ蔑視」があることが指摘される。これは見逃し得ない指摘である。戦争という大河の激流もこのような心情を泉としている。著者はこれをプーチンの論文「ロシア人とウクライナ人の歴史的一体性」と「開戦演説」から解き明かす。そしてこの流れの中で、一九九一年のウクライナ独立から現今の戦争状況を分析している。この第Ⅰ部で特筆すべきは、著者がロシアの軍事侵攻を高みから批判するのではなく、日本の負の歴史と重ねつつ加害者意識をもって記述していることである。

第Ⅱ部では「平和に生きる道と『国家安全保障』」について憲法の平和に焦点を当てつつ述べる。筆者は憲法を論じるに際して「戦争責任」からアプローチして、「加害性の自覚なしに講釈するいかなる憲法論も私は否定する」（七三頁）と主張する。そして憲法が想定していない平和と想定している平和を示して、後者は「歴史の終末論的ゴールとしての平和」であるとする。それは安全を平和と混同しないというボンヘッファーの主張とつながる。具体的には「核なき世界の実現」、「民衆の社会安全保障」等が提案され、「非暴力による平和創造」へと導かれるのである。

筆者の的確な神学的洞察に基づく戦争と平和構築に関する分析および提言は、この暗い時代にあって行くべき道を照らしていると思う。

（てらぞの・よしき＝九州大学名誉教授）

（B5判・一二八頁・定価一二一〇円・いのちのことば社）

現代社会における「ことばの力」の回復を目指して

ことばの力

キリスト教史・神学・スピリチュアリティ

関西学院大学キリスト教と文化研究センター［編］

キリスト教において、「神のことば」「神に関わることば」はどのように理解され、どのような文脈でどう語られたのか。礼拝、文書、コミュニケーションにおいて、どのような役割を果たしてきたのか。7人の研究者が現代におけるキリスト教と「ことばをめぐる諸問題」に、歴史、組織・実践神学、スピリチュアリティの視点から立ち向かう。

四六判・並製・166頁、定価1,760円(税込)

キリスト新聞社 since 1946
169-0051東京都新宿区新小川町9-1 4F
03-5579-2432 support@kirishin.com

†本・批評と紹介

バルトが切り開いた前人未到の道を案内する

〈評者〉福嶋　揚

カール・バルト《教会教義学》の世界
寺園喜基著

『教会教義学』はキリスト教史上最大の単著である。その難解なテキストを一行一行辿る道のりは、長くて厳しい。読み通すだけでも数年はかかる。それだけに、細部を見るだけでなく全体像を展望できるようなオリエンテーションがどうしても必要となる。細部の地形だけでなく、グーグル・アースのように上空からその地の大まかな特徴を見せてくれる、学びの手助けが不可欠である。

寺園喜基氏による『カール・バルト《教会教義学》の世界』は、この『教会教義学』全体を鳥瞰して要約する、日本語ではおそらく初めての、適切な分量の概説書である。本書は、遺稿集も含めれば一万頁を超える『教会教義学』の全体を、何十分の一かの分量に圧縮して再現している。バルトのドイツ語テキスト約三十ページが、本書の約一ページの日本語に凝縮されているのである。『教会教義学』を構成する全四巻――プロレゴメナ、神論、創造論、和解論――の各巻の各部分が、どこにも偏ることなく、きめ細かく再現されている。しかもバルトの原文に特有な難解さをひきずることなく、簡潔かつ平易に書かれている。

それに加えて本書では、『教会教義学』に至るまでのバルト神学の形成過程も解説されている。政治的社会的な背景にも折に触れて言及されている。索引や聖書箇所も充実している。神学教育の参考書や教科書にも相応しい一書である。

ちなみに書評者自身は、たまたま今、カトリック神学者ハンス・キュンクの翻訳に取り組んでいて、そのさなかに本書をひもとく機会を与えられた。教派の壁を超えて青年キュンクを深く魅了し、カトリック教会の勇敢な変革へと向かわせた『教会教義学』の力、すなわちバルトの説く福音の力を、寺園氏の本書を通して、改めて認識させられた。

その一方で、本書を読みながら次のようなことも考えた。『教会教義学』は、西欧キリスト教世界の内側に根差して築き上げられた、最後にして最大の神学的な巨大建造物だったのではないかと。一九六〇年代、キュンクが全世界を旅行することによってキリスト教世界をはるかに超えて視野を拡大していった頃、バルトはこの巨塔を完成することなく世を去った。改めて思う、この『教会教義学』が探求して残したものは何だったのだろうか。

それを敢えてつきつめて言えば、人間が何を企てようと、神と呼ばれる力が人間に向って到来するということではないだろうか。バルトによれば、神は神以外の何ものでもない。神より大いなるものを考えることはできない。神は自らに相応しく自らを貫徹する。だとすれば、人間が神について語ることなど不可能だろうか。語りえないものについては沈黙すべきだろうか。

バルトはそのようなアポリアを突破して、神のほうから神自身を語らしめるという道、つまり「神の言葉の神学」を見出した。それも、ほかならぬイエス・キリストという一点を突破口としての「神語り（theo-logia）」、すなわち語の本来の意味でのキリスト教神学（theology）を企てたのである。寺園氏の最新著を読むことによって、そのようなバルトが切り開いた前人未踏の道に刮目させられる。

（ふくしま・よう＝東京大学大学院等にて講師）

（四六判・三六〇頁・定価三〇八〇円・新教出版社）

新型コロナのパンデミックによって見いだされた、教会の新たな境地

日本クリスチャン・アカデミー共同研究

コロナ後の教会の可能性

危機下で問い直す教会・礼拝・宣教

荒瀬牧彦［編］

浦上　充　渡邊さゆり
仲程愛美　越川弘英
吉岡恵生　中道基夫
片岡義博　［著］

コロナ禍で教会に突きつけられた神学的な課題とは何か。それを検証しつつ、パンデミック収束後の諸教会に向けて、「今までのようにはいかない」現実を見据えて、新たな可能性の具体案を提示する。日本クリスチャン・アカデミーとキリスト新聞社による共同大規模アンケートの結果も収録。

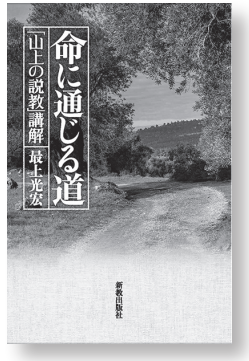
A5判・並製・138頁、定価1,650円（税込）

キリスト新聞社 since 1946
169-0051東京都新宿区新小川町9-1 4F
03-5579-2432 support@kirishin.com

†本・批評と紹介

しなやかに、まっすぐに、読者を打つ説教

〈評者〉佐々木潤



命に通じる道
「山上の説教」講解
最上光宏著

「わかります！」。私がこの本を贈ったその人は、読み始めてしばらくしてから嬉しそうに顔を上げて、そう言った。どうしてそう言うのかが私にもわかる。よくわかるのである。平易ということではない。難しい箇所を奥深くまで解いていても「通り」が良く、清々しいのである。「山上の説教」（マタイ5―7章）を分かりたいと思う人は、この本を手に取ることで、いま望みうる中で最適の道案内を得る。信頼できる手本である。ここに「学び、まねぶ」ことで、群衆が主イエスの言葉になぜあれほど驚いたのかを知るだろう。真の権威を悟るからである（説教1と22）。

弘前教会で私が先生と出会ったとき、前任の教会ですでに『天に宝を』という山上の説教の説教集を編んでおられた。浴びるようにその説教を聞いたのは、高校時代の二年間に過ぎなかったが、その間に「山上の説教」も講じていただいた。

主イエスが丘の上におられ、弟子たちが主を見上げながらその周りを囲み、さらにその周りを群衆が囲む。主の言葉は、弟子たちと群衆、教会と世を乖離させるような二方向・二種類のものではなかった。同じ祝福と約束、命令と招きが、弟子たちと群衆に届いてくる。弟子たちは群衆を背にして主のお姿に集中するが、主のまなざしは弟子たちだけを切り取るように見るのではなく、群衆を背後にした弟子を、そこから呼び出され、そこへと遣わされる一人ひとりとしてご覧になるのである。そして当然だが、群衆は弟子たちの背中を見、弟子たちの肩越しに主を見る。この「同心円」の群れ全体を吹き抜けるガリラヤの風は、主イエスの声とともに、弟子たちの頬をなで、群衆の胸元をふるわせ、大地と湖面に吹き渡る。

「ガリラヤ湖を望む山上に招かれた人々の一人になった思いで」私も聞いた。聞いて、主の道が開かれた。ついていきます、と私は思った。キリスト者であることの喜ばしさ、主の約束と使命に生かされて世のために歩む教会の誇らしさを叩きこまれ、そして私は神学校に行くことになった。

あのころの先生は四〇代とはいえ、育ち盛りの子供たちのひしめく牧師館であの説教を準備なさりながら超多忙な牧会の日々であられたのに、数日に一度教会の集会にやってきてはそのあと日付が変わるころまで牧師館に入り浸る高校生の相手をしてくださった。おかげで今の私があるのだが、カバーに載る著者近影の白髪は私のせいだ。そのまなざしは私の行く末をなお心配そうに見ているかのようだ。だが私の他にもひそかに心苦しく思っている人はたくさんいるのだろう。

先生の説教は、書道の書体で謂うなら「楷書」である。お手本のような筆の運びは一点一画も崩さない。しなやかで活き活きしたその字体でなぞる主の御言葉はまっすぐに心を打つ。練りに練られ工夫に工夫を凝らしているのに、技巧を見せつけず、邪念も、擦れも、ぶれもない、誠実な説き明かし方は、若き日の書体と変わらない。これだけ年月を経ているのに、説教の言葉が老け込んでいないで、むしろ、みずみずしさを増している。それは山上の説教を構成する同心円の中心から汲み続けてこられたからなのだろう。もつれた糸を切らすことなくほぐすように説く、説教7と18が印象深い。これから読む人には説教2を必ず読んでほしい。「戦責告白」の講解でもある。先生の生涯のはたらきは、その中の「預言者的使命」という言葉がふさわしい。

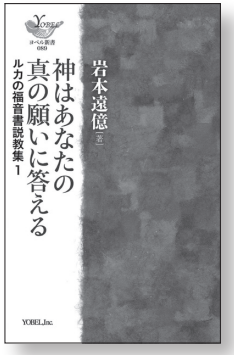
（ささき・じゅん＝日本基督教団武蔵野教会牧師）

（小B6判・一八四頁・定価一六五〇円・新教出版社）

†本・批評と紹介

イエスの愛といのちに生かされて

〈評者〉島先克臣



神はあなたの真の願いに答える
ルカの福音書説教集1
岩本遠億著

本書は、神田外語大学大学院の言語学教授である著者が、ご自分の牧する「キリストの平和教会」で語ったルカの福音書講解説教シリーズの第一弾である。

この書には三つの特徴があると思う。

まず、わかりやすい説教でありながら、当時の歴史背景を詳しく説明していることだ。たとえば、祭司ザカリヤが務めた聖所での役割が、一生に一度のチャンスでもあったことがよく伝わる解説がある。90年代以降の発掘調査に基づき、ヨセフとイエスがナザレ近くのギリシア都市ツィポリの建設に携わっていたであろうという新しい説は実に興味深いし、カペナウムの百人隊長と領主ヘロデとの関係についての説明も詳しい。また、天の御国を歴代誌上28：4–5の「主の王座」、また、歴代誌下13：8の「主の王国」と結びつけた点も新鮮だった。

次は、行間を読んで、登場人物を立体化することだ。洗礼者ヨハネが物心つく頃、父ザカリヤに「ねえ、お父さん。どうして僕はお父さんの名前…をもらわなかったの？」と尋ねる場面を想像し、ヨハネが祭司ではなく、メシアの道備えをする預言者としての意識を持って育ったのではないかと提案する。荒野におけるサタンの誘惑の一つは、「神様、私のことを愛しているんですよね」と神の愛を確かめさせることだという。そして「愛は確かめられたときに死ぬのです」と著者は語る。

第三は、実例が多く用いられていることだ。まず、著者自身の背景や体験が織り交ぜられている。著者の自叙伝『聖霊の上昇気流』（ヨベル、二〇二二年）に詳しいが、ニューギニアで命がけで宣教した時のことなど、さまざまな奇跡的な体験を語ることによって、メッセージを単なる「講話」ではなく、今、ここで生きておられるキリストの力強い言葉に変えている。また、「いさおなき我を」の作家シャーロット・エリオットの生涯と詩が紹介され、感動的に神の愛の大きさ深さを伝えている。

読み進む中で感じたことがある。それは、書の終わりに向かってイエスの愛といのちがクレッシェンドのように迫ってくることだ。罪も汚れも、それはいのちの欠如。イエスは私たちを愛し、いのちに満たそうとしているというメッセージだ。著者は、ギリシアの霊肉二元論に陥らないように読者に警告を与えながら、最後の章「キリストは、あなたが死んでもあなたを諦めない」では肉体の復活を説き、イエスのいのちは、私たちの心だけでなく、体にまで豊かに満ちる、それを今も受け止めることができるのだと言って書を閉じる。

聖書は古代のオリエントで編纂された古代の文献だ。古代人が古代人に向かって書いたものである。だから、その意味を探るために、さまざまな努力がなされてきた。ただ、当時の意味を知的に探究するだけでは「神のことば」を正しく扱っているとは言えなのだろう。古代の古びた文献から、イエス・キリストが立ち上がり、今、ここに生きる私たちに愛を語り、いのちをリアルに与える。キリストの口から出る聖霊の息吹を感じさせるのが本書と言えよう。

（しまさき・かつおみ＝聖書を読む会総主事）

（新書判・二一六頁・定価一三二〇円・ヨベル）

旧新約聖書の祈りの御言葉とショートメッセージ

聖書の祈り31
主よ、祈りを教えてください
大島 力／川﨑公平

旧約と新約から祈りの言葉を1日にひとつずつ取り上げ、わかりやすい解説を付して31日分を収める。1日10分、この本を静かに読んで、心を高く上げる。そんな毎日を始めませんか。
●四六判 並製・144頁・定価1,650円

当代一流の聖書学者が、教育の根本を旧約聖書から解き明かす

人を育むみことば
教育のモデルとしての旧約聖書
W.ブルッゲマン
宮本あかり 訳

私たちは聖書からキリスト教教育をどのように語ることができるのか。その問いに対して著者は、旧約聖書(トーラー、預言者、諸書)の正典化のプロセスこそがその大きなヒントになる、と述べる。
●A5判 並製・240頁・定価3,960円

『礼拝と音楽』人気連載「礼拝とシンボル」を加筆し単行本化！

シンボルで味わう典礼・礼拝
宮越俊光

キリスト教の典礼・礼拝は多くのシンボルで彩られている。諸教派の典礼・礼拝で用いられる所作、司式者の服装、祭具、典礼色や数字などの由来と変遷、現在の用いられ方を紹介。
●A5判 並製・248頁・定価3,080円

日本キリスト教団出版局
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3204-0422 FAX 03-3204-0457
E-mail eigyou@bp.uccj.or.jp《価格10%税込》
https://bp-uccj.jp

†本・批評と紹介

豊かな霊性と情緒性を伴うキリスト者の人格へ

〈評者〉**太田和功一**

語らいと祈り
信仰の12ステップに取り組んだ人々の物語
松下景子著

本書の著者松下景子氏の依頼で、「信仰の12ステップ」参加者のために、毎年一泊二日の祈りと黙想のリトリート（ステップ11・祈りと霊的覚醒）を十数年間ファシリテートしてきた者として待望の書が出版されたことを喜んでいます。

「信仰の12ステップ」の概要や特徴、また、その必要性については、公認心理師であり臨床心理士でもある家山めぐみ氏がご自分の体験をもとに推薦の言葉で述べておられます。また、巻末の「信仰の12ステップはじめの一歩」ではその具体的内容と始め方や進め方について分かりやすく説明されています。

著者は、教会に起こった大きな問題の解決を求める中で、「信仰の12ステップ」を日本で始められた広瀬勝久氏に出会い、この自助グループに参加し、後には、ファシリテーターとして、また、事務局の責任者として、延べ４２０人を超える人々と、誠実に自分自身に向き合い、神の助けと導きを共に求める交わりをもってきました。本書は著者の28年間にわたるその経験のふり返りがもとになっています。

本書を読んで心が刺されるのは、副題にあるとおり、実際に信仰の12ステップに取り組んだ人々の人生と信仰のストーリーです。著者をはじめ、もう一人推薦の言葉を寄せておられる小暮敬子氏、また、実名・匿名で5名の参加者の赤裸々な体験が率直に語られていることです。

立場があいまいであっても、多岐にわたる役割が求められる教職者夫人としての疲れ、無力感や敗北感、また、それを分かち合う場のない孤独感、そして、燃え尽きとうつ状態などの苦しみ、人間関係の中での共依存性、壊れた家庭で育ったゆえのゆがみ、人に必要とされたい欲求などが率直に語られています。

ある人は、夫婦・親子関係の中での依存関係、子どもの親への怒りや引きこもりとうつ症状、そして、逸脱行動などの悩みを、またある人は、社会的には認められ、教会でも役員として責任を負っていても、家庭では妻に当たり、子どもを顧みず、自分に向き合うことなく、自分の弱さを隠してひたすら働く中で突然うつ病に襲われたことを正直に告白しています。

親の離婚で誰にも頼れず、若くして妹と二人きりで暮らし、大人への怒りをバネにしてがんばっていきてきた人は、〝何よりも、誰よりも、強がって生きてきた。決して強くないけれど、強く見せることでしか自分を保てない。いつも正しくあることにしがみついてきた。でも、自分なんていない方がいいと思う死にたい気持ちをずっと持ってきた〟と語っています。

ある牧師は、いわゆる宗教二世に近い子供時代を過ごし、〝神さまは愛の神ではなく、いつも怒っている怖い神さまであり、毎日死が怖かった。また、いつも親の期待と教会の期待に添うように自分の好きなこともあきらめてきたと思う〟と述懐しています。

一人息子の中学から始まった不登校、家庭内暴力、やむを得ずの子どもとの別居、そんな中で、子どもから逃げた親であると自分を責めリストカットするところまで追い詰められたことを打ち明けることができた人もいます。

このように自分の痛みや無力さを分かち合えるようになる場が「信仰の12ステップ」です。そして、そこからスタートして、いやしと回復、成長と解放を共に求めてゆく交わりがここにあります。

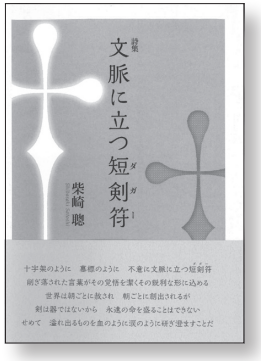
個人的なことですが、筆者は10代の頃、信仰の12ステップを日本に紹介した広瀬勝久氏とは同じ聖書研究会の仲間でした。その後、会う機会はありませんでしたが、30数年後に広瀬氏から一通の手紙をもらいました。そこには「あなたと友情を深めたいと願っています。交わりの時を持てたらうれしいです。いかがでしょうか。」とありました。私たちは定期的に会うようになり、心の友としての交わりを持つことができました。多くの人の痛みに寄り添い、自分自身の痛みにも誠実に寄り添い、率直に共有してくれた広瀬氏の願いが実現しつつあることを心から喜んでいます。

（おおたわ・こういち＝クリスチャンライフ成長研究会［CLSK］シニアアドバイザー）

（四六判・一七六頁・定価一六五〇円・ヨベル）

言葉を削ぎ落として感覚を研ぎ澄ます

〈評者〉**並木浩一**



詩集
文脈に立つ短剣符（ダガー）
柴崎　聰著

著者は日本キリスト教詩人会の会長。多数の詩集と評論によって知られた詩人で、紹介の必要がない。本書は多分、一四冊目の詩集である。著者は日常的な言葉を磨き抜いて、これを硬質な言葉に変える。この人の詩を読むと、何があなたの人生の中でキラリと光っているのかと問われている気がする。

書名に用いられた「短剣符」は、新共同訳の福音書が後代の加筆であると想定される節の削除を示すために用いた記号だが、著者には旧知の当該箇所への注意を促すこの記号が新たな意味を帯びて立ち現れる。それが福音書での節の削除という、存在と非存在との裂け目に不意に姿を現すからである。その気づきが人生の真実への問いに変わる。書名は不思議なフレーズであって、詩人にも読者にも異化作用を発揮する。書名がその意味を簡単には分からせまいとする詩的な高度感を醸し出している。

しかし、こんな抽象的な言葉を並べても、詩集の紹介としては大した意味を持たない。そこで書評としては異例のことながら、実際の詩を引用し、詩集の特質を詩の言葉みずからに語らせたい。詩人は詩集の冒頭に「貴腐ワイン」と題した詩を掲げて、詩集の性格を語る役割を負わせている。紙幅を考えて第一、第二、第五連を書き抜くことにしよう。

はるか昔　預言者イザヤは高らかに伝えている
葡萄の房に果汁を見出したなら
それを腐らせてはならない
そこにこそ祝福があるのだから

得心した末に思う
腐らせることにも祝福がある
貴腐ワインを見よ
高貴な腐敗とは　言葉の矛盾ではないか

腐敗の賤（せん）を経て実りの貴（き）に至るその道のりは
外見の美醜を軽々と超えることで
半乾きの果実の選別にこそ
おのれの覚悟と馥郁とした祝福を連れ立たせるのである

この詩は信仰者の希望の根源を問うている。冒頭、詩人は神がご自身に対して背信を重ねた結果、惨めな状態に陥っている民を見捨てず、良い葡萄の実りを約束するという、神の祝福の言葉（イザヤ書六五章八節）に思いを寄せる。詩人の関心は第三連に入ると特殊な葡萄に向けられる。白葡萄の実に付着したカビによって粒の表皮は腐り、実は皺だらけになって糖度を高め、最後には琥珀色の貴重な「貴腐ワイン」へと変身する。詩人はその「貴腐」という言葉の矛盾に感じ入るが、ふと、「腐敗の賤を経て実りの貴に至る」という道のりに引き付けられる。われわれは単に腐って終わるだけの「半乾きの果実」に過ぎないのではないか。一瞬、緊張が走る。だが思いが飛翔する。「馥郁とした祝福を連れ立たせる」あのお方こそが、真の「貴」に至る「腐」の道のりを歩んだのではないか、と。言外の示唆を密かに埋め込んで、この詩は終結する。

詩人は「あとがき」で、この数年の詩は「物語詩」に傾斜していると認めている。確かにこの詩集の多くの詩は詩人の体験に寄り沿うものであるが、語られた体験や美しいものへの眼差しを語る詩たちの奥底に、解放された生への願いと祈りがある。この静かな囁きを聞き取りたい。

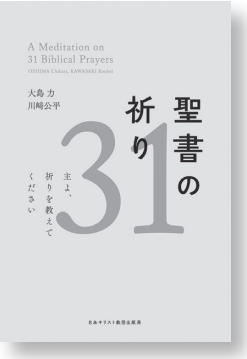
（なみき・こういち＝国際基督教大学名誉教授）

（A5判・八〇頁・定価一五四〇円・土曜美術社出版販売）

†本・批評と紹介

旧新約聖書に導かれて毎日祈りましょう！

〈評者〉加藤常昭



聖書の祈り31
主よ、祈りを教えてください
大島　力、川崎公平著

書名が示すのは、聖書の祈りを31日かけてじっくり学ぼうということです。旧約聖書16の祈りを、定評のある旧約学者、青山学院大学宗教主任であった大島力牧師。新約聖書15の祈りを、東大でギリシャ語を専攻し、いまは鎌倉雪ノ下教会の説教者として評価の高い川崎公平牧師が担当しています。このお二人と編集者とが協力して、丁寧に造り上げた製作者の意図がよく現れた好著です。とてもよい祈りの導きの書物が新しく加えられたと喜んでいます。

まず聖書のテキストが読まれ、続いて黙想が記され、最後に素朴な短い祈りの言葉が記されます。

旧約聖書の祈りは、アブラハムに始まり、幾つもの祈りが紹介されます。たとえば、サムエル記上第1章ハンナの祈りです。大島牧師は、ハンナの祈りが「胸の内を注ぎ出す祈り」であったことをこう黙想します。「この『自分の胸の内を注ぎ出す』とは『私の魂を注ぎ出す』ということです。誰からも、また祭司からも理解されないような中で、『自分の胸の内』『自分の魂』を神に注ぎ出すことが祈りです。ですから祈りとは単なる祈願ではありません。その願いを含めて自分の憂いと悲しみをすべて神の前に、つまり『全存在』を神に注ぎ出すことです。そのような祈りに必ず神は応えてくださいます」。すぐれた黙想です。そして最後にこういう短い祈りが続きます。「神よ、私にも祈らせてください。私の願いも憂いも悲しみも、すべてをあなたの前に注ぎ出します」。

新約聖書の祈り15はまことに多様です。中には、そのままでは祈りとも言えないような言葉まで取り上げられます。主イエスが甦られたとき、その墓を訪ねたマグダラのマリアの物語です（ヨハネ第20章）。川崎牧師はこう書きます。

「（前略）聖書から祈りを学び続けています。その際どうしても省略できないことは、〈復活の主の御前で生まれる祈り〉です。しかしその観点から言えば、この聖書の箇所（ヨハネ20・11～16）はあまり適当でないと思われるかもしれません。一見、祈りらしい祈りが見当たらないからです。

『誰かが私の主を取り去りました。どこに置いたのか、分かりません』。『あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか、どうぞ、おっしゃってください。私が、あの方を引き取ります』。前からは天使が、後ろからは主イエスが声をかけても、マリアは聞く耳を持ちません。ひたすらに自分の涙の世界に引きこもろうとします。そのマリアの不信仰を、誰も責めようとは思わないのです。すべての信仰者が、こういう不信仰な、また絶望的な祈りを知っているからです。『イエスさま、どこにもいないじゃないですか』。その祈りを、お甦りのキリストの前ですることが大事です。

マリアの不信仰と絶望がどんなに深くても、主はマリアの後ろに立って、そして声をかけてくださいます。その事実に揺らぐところはひとつもありません。そこに新しい祈りが生まれました。『イエスが、「マリア」と言われると、彼女は振り向いて、ヘブライ語で「ラボニ」と言った。「先生」という意味である』。

ひとつ不思議なことがあります。誰に何を言われてもわからなかったマリアが、なぜ主イエスだと気づいたのでしょうか。どこでわかったのでしょうか。福音書はその点、理屈っぽい議論をしません。ただ、主がマリアの名を呼んでくださったことだけを伝えます。名を呼ばれたら、マリアはすぐにわかったのです（後略）」。

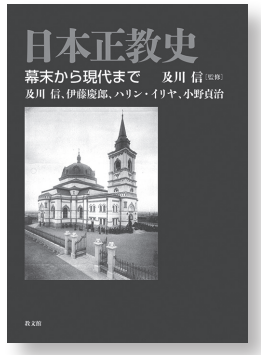
この黙想の後に、こういう祈りが続きます。「羊飼いイエスよ、私はあなたの羊です。私があなたを見失っても、あなたはいつも、私と共におられます。イエスさま、大好きです」。

（かとう・つねあき＝日本基督教団隠退教師）

（四六判・一四四頁・定価一六五〇円・日本キリスト教団出版局）

待望の正教布教の通史、ついに刊行！

〈評者〉**鈴木範久**



日本正教史
及川　信、伊藤慶郎、ハリン・イリヤ、小野貞治著
及川　信監修

本書を手にしたとき、まず思い出されたのは三人の方たちである。

一人は牛丸康夫さんである。今や漠然とした記憶であるが、牛丸さんと私は、二人で道を歩きながら語り合っていた。その道がどこか、その時がいつかも覚えていない。ただ、牛丸さんは正教会の聖職者であったから、私は、正教の資料の公開を訴えたと思う。当時の正教会側には、資料の公開はもとより、外部の研究者を受け付ける窓口すら無かった。このような声に応じる必要を感じたのか、牛丸さんは、熱心に日本正教史の通史を書きたいとの希望を語った。その後、牛丸さんの『日本正教史』が一九七八年に刊行されたので、同書は我々の声にも答えた書物となった。しかし、牛丸さんは、それから数年後に、今から思えば、比較的若くして世を去ってしまった。その時から数えれば二〇二三年は、実に四十五年もの年月が経過したことになる。本書のような新しい『日本正教史』が出されても不思議でない。牛丸さんも本書の刊行を歓迎していることであろう。

次は中村健之介さんである。中村さんを監修者として『宣教師ニコライの全日記』九巻が二〇〇七年に教文館から刊行されたとき、私は、その内容見本に「推薦のことば」を寄せた。そのなかで「日本各地のキリスト教の源を尋ねはじめたころ、きまってロシア正教会により伝道の種が蒔かれていた事実に出会い、一驚した」と記した。これは、ニコライの薫陶を受けた初期の日本人信徒たちの伝道が大きな力となって作用したためである。今度新たに刊行された本書を見ると、随所に、この「ニコライの日記」が活用されていて喜ばしい。さらに本書を通読して驚いたことは、全体の実に三分の二強のページが、「大主教ニコライとその時代」で割かれている点である。この間、明治維新、日露戦争など、日本にもニコライにも大変な時期があった。それにもかかわらずニコライが、多くの日本人に尊敬された存在であったことの意義は大きい。

もう一人は、某出版社の課長のAさんである。Aさんは、その出版社の企画による宗教辞典の編集を担当していた。その辞典の編集会議には、筆者も執筆側として参加していた。用語などの選定にあたって判明したことは、Aさんが常に、その信仰するロシア正教の用語を加えたがっていることであった。わたしは、ロシア正教独自の用語を数多く加えるとすると、宗教辞典としては相当な大著となってしまうので、Aさんに、その旨を説明すると、すぐに納得してくださった。そのAさんからは確か『日本正教』という題名の小冊子を頂いた。それを見て判明したことは、ロシア正教といっても、アメリカ軍による日本占領下にあっては、アメリカ人主教により支配されたため、ロシア側は別のところで礼拝を守り始めたこと、そして私の頂戴していた『日本正教』なる雑誌は後者の機関誌であることであった。辞典の企画が終わっても、しばらくの間、その雑誌は私のもとに届けられていたが、ある時を契機に、突然送付されなくなった。まもなくして両者の間に和解が成立したとの話が入ってきた。私は、その間の事情がわからないまま、時が過ぎていたが、今度刊行された本書を読むと、その経緯が実に詳細に記されていて、はじめて両者の間に成立した調停の実態を理解できた。

短い紹介なので本書を充分に語ったことにはならないが、ここに述べた二、三例においても、新事実の語られている新たな正教史として本書を推奨したい。

（すずき・のりひさ＝立教大学名誉教授）

（A5判・四四二頁・定価五五〇〇円・教文館）

既刊案内（2023年8月～2023年9月）

編・著・訳者	書名	判型	頁	定価(税込)	版元	発行日
近藤勝彦	わたしの神学六十年	四六	220	1,980	教文館	8／2
K.シュミート著／小友聡監訳／日高貴士耶訳	旧約聖書神学	A5	608	8,140	教文館	8／23
土橋茂樹	教父哲学で読み解くキリスト教 —キリスト教の生い立ちをめぐる３つの問い	四六	236	2,640	教文館	8／25
賀来周一文／峯田敏幸絵	毎日み言葉ポストカード	ポストカードサイズ	32	1,320	キリスト新聞社	8／2
小島誠志、川﨑正明、上林順一郎、島しづ子、渡辺正男著	夕暮れに、なお光あり。 —老いの日々を生きるあなたへ	A4	162	1,650	キリスト新聞社	8／25
エーディンガー著／喜多村得也訳	ドイツ敬虔主義著作集８ 聖なる哲学 —キリスト教思想の精選集	四六	288	2,200	ヨベル	8／2
富田正樹	疑いながら信じてる50 —新型キリスト教入門　その１	四六	192	1,540	ヨベル	8／25
最上光宏	命に通じる道 —「山上の説教」講解	小B6	184	1,650	新教出版社	8／10
大島力、川﨑公平著	聖書の祈り31 —主よ、祈りを教えてください	四六	144	1,650	日本キリスト教団出版局	8／21
W.ブルッゲマン著／宮本あかり訳	人を育むみことば —教育のモデルとしての旧約聖書	A5	240	3,960	日本キリスト教団出版局	8／24
宮越俊光	シンボルで味わう典礼・礼拝	A5	248	3,080	日本キリスト教団出版局	8／25
菅幸子	神の御手に導かれて	四六	122	990	日本キリスト教団出版局	8／30
金子晴勇	キリスト教思想史の諸時代　別巻１ —アウグスティヌスの霊性思想	新書	256	1,320	ヨベル	9／1
大貫隆	原始キリスト教の「贖罪信仰」の起源と変容	四六	304	2,200	ヨベル	9／4
下村喜八	苦悩への畏敬 —ラインホルト・シュナイダーと共に	四六	256	1,870	ヨベル	9／22
浅野淳博	新約聖書の時代 —アイデンティティを模索するキリスト共同体	四六	484	4,620	教文館	9／6

編・著・訳者	書名	判型	頁	定価(税込)	版元	発行日
浅野忠利	修道院からモダニズムへ —ドイツ手工業職人の精神と系譜	A5	332	2,750	教文館	9／25
袴田康裕	ウェストミンスター信仰告白講解　下巻	A5	400	5,280	一麦出版社	9／19
晴佐久昌英	贈りもの —晴佐久昌英クリスマス説教集	四六	138	1,320	キリスト新聞社	9／20
志村拓生編曲	讃美歌21による賛美歌伴奏曲集　第８巻 —前奏とさまざまな伴奏	A4	80	2,200	日本キリスト教団出版局	9／25
小林ようこ	これからを生きるあなたへ —聖書の知恵　箴言31日	四六	80	1,320	日本キリスト教団出版局	9／25
山根道公監修	遠藤周作366のことば	四六	160	1,980	日本キリスト教団出版局	9／25
関口安義	内村鑑三　闘いの軌跡	A5	603	7,975	新教出版社	9／25

書店名	郵便番号	住所	電話	ファックス	URL	メール	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西６丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jb-shop.com	sasaki@jb-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用		zenrinkan_syoten_0530@yahoo.co.jp	02350-0-874
仙台キリスト教書店	980-0012	仙台市青葉区錦町1-13-6 東北教区センター・エマオハウス	022-223-2736	共用		fqcwk524@ybb.ne.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	千葉市中央区新宿2-9-2 千葉クリスチャンセンタービル	043-238-1224	043-247-3072	http://www.keisen.christian.jp	keisen@vesta.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
待晨堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	共用	http://taishindo-books.jimdo.com/	taishindo@jcom.home.ne.jp	00110-8-95827
バイブルハウス南青山	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3567-1995	03-3567-4435	http:/biblehouse.jp	biblehouse@bible.or.jp	00160-2-18410
東京キリスト教書店	162-0814	東京都新宿区新小川町9-1日キ販内（外販専門）	03-3260-5663	03-3260-5637		tokyo@nikkihan.co.jp	00130-3-60976
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www7b.biglobe.ne.jp/~yokohamacbs/index.html	sksch@mva.biglobe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用			00560-8-51419
静岡聖文舎	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612	http://www.s-seibun.co.jp/	info@s-seibun.co.jp	00810-8-26558
名古屋聖文舎	466-0045	名古屋市昭和区広路町3-16 日本キリスト教団東海教区内	052-680-8090	052-680-8091	http://nagoya-seibunsha.la.coocan.jp/	nagoya-seibunsha@nifty.com	00810-5-14073
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神口通河原町東入ル	075-211-6675	075-211-2834	http://web.kyoto-inet.or.jp/people/kjordan/	kjordan@mbox.kyoto-inet.or.jp	01010-2-594
大阪キリスト教書店	530-0013	大阪市北区茶屋町2-30	06-6377-6026	06-6377-6027	http://osakacbs.web.fc2.com/	ochrbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9-18三陽ビル2F	078-331-7569	078-945-9388		kobex@nikkihan.co.jp	00170-2-421390
広島聖文舎	730-0841	広島市中区舟入町12-7	082-208-0022	082-208-0177		hseibun0951@yahoo.co.jp	01360-4-1958
リバーサイドブックス	779-1105	徳島県阿南市羽ノ浦町古庄大道ノ西13	090-8694-4986	050-3142-3017		ykwbt3@gmail.com	16220-17974891
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一万町1-23	089-921-5519	089-921-5413	http://www.geocities.jp/matsuyama_1007/index.html	sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484	http://www.sinseikan.jp/	info@sinseikan.jp	01750-5-10932
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用		k-haleruya@bible.or.jp	00160-2-18410
沖縄キリスト教書店	904-2143	沖縄県沖縄市知花４丁目12-33	098-927-0220	098-938-1102	https://www.okinawacbs.net	info@okinawacbs.net	01790-4-152916

※一般書店関係の方は　日キ販営業部　℡ 03-3260-5670 にご連絡ください。

原始キリスト教の「贖罪信仰」の起源と変容

東京大学名誉教授 大貫隆著

圧倒的反響！

贖罪信仰そのものが、いまだ議論と再検証の卓上に置かれている！ イエスは人類の罪を贖うため身代わりとなって神に裁かれ十字架で死なれた。この〝贖罪〟を「キリスト教信仰の要諦」とする考えは、何処を起源とし、いかなるプロセスを経て変容・発展・定着してきたか。贖罪信仰の核心に迫り、キリスト教の再構築を静かに促す。

四六判・三〇四頁・二三〇〇円

富田正樹著 新型キリスト教入門 その1 疑いながら信じてる50

忽ち再版出来！

「疑いながら信じる」以外の信じ方って、ある?・できる?

私は疑いながら信じています。キリスト教を信じる人たちの中には疑いなど全く抱かずに、まるっきり無邪気に信じ込んでしまっている人がいます。それはそれで結構……でもどう展開しますか、歩みますか!?

四六判・一九二頁・一五四〇円

下村喜八著 苦悩への畏敬 ラインホルト・シュナイダーと共に

［京都府立大学名誉教授］

反響！

シュナイダーが生きているかぎり、ドイツは良心をもっている。

ナチス政権下にあってドイツの良心そのものを生きた詩人、思想家のシュナイダー。深い敬慕を込めて辿る。キリスト教理解を根底から一変させた生き様に倣い、この時代と闘う。

四六判・二五六頁・一八七〇円

青野太潮「聖書の真実」を探究する どう読むか、聖書の「難解な箇所」

3版出来！

「大いに疑問を持つ」探求者に、聖書は真実の姿を明かし始める。

訳語、解釈の如何によって天地が入れ替わるほど真逆の結論に導かれてしまう。この難解さとどう向き合えばよいのか。その「難解な箇所」を敢えて取り上げ、正面から挑んだ！ 青野太潮の「どう読むか」、好評第2弾。

新書判・一三二〇円

西谷幸介 母子の情愛と日本人 「日本教」の極点

新書判・一四三〇円

日本には、神道でも、仏教でも、キリスト教でもなく、「日本教」という宗教が存在しているに過ぎないのか。人々の意識や宗教観に織り込まれた「母子の情愛」と日本社会の深層をたどる。改題改訂新版

ドイツ敬虔主義著作集 全10巻

［ヨーロッパ思想史］

画期的著作集 刊行開始！

金子晴勇責任編集

第1巻 シュペーナー『敬虔なる願望』佐藤貫史、金子晴勇訳
第2巻 シュペーナー『新しい人間』山下和也訳［第四回配本予定］
第3巻 シュペーナー『再生』金子晴勇訳
第4巻 フランケ『回心の開始と継続』菱刈晃夫訳
第5巻 ベンゲル『グノーモン』と『歩んだ道と言葉』金子晴勇訳
第6巻 ツィンツェンドルフ『福音的真理』金子晴勇訳［第二回配本予定］
第7巻 エーティンガー『自伝』『喜多村得也訳［第三回配本予定］
第8巻 **エーティンガー『聖なる哲学』『喜多村得也訳**［第一回配本 好評発売中！］
第9巻 テルステーゲン『真理の道』金子晴勇訳
第10巻 ドイツ敬虔主義の研究　第8巻　四六判・上製・二八八頁・三二〇〇円

福音と世界

2023年12月号

特集　アナーキーな共同体

寄稿者＝ロマン・A・モンテロ、有住航、山下壮起、工藤万里江、矢野静明、笹塚コミューンほか対談

好評連載　八木重吉の聖書（今高義也）私は告白する、私の神を（長尾優）、地域から考える在日朝鮮人史と教会史（金耿昊）、グレート小林と三人の女（飯田華子）、神と「女性的なるもの」を辿って（後藤里菜）、古代イスラエル文学史序説（勝村弘也）ほか

A5判・定価660円・〒70円

定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

新教出版社　TEL：03-3260-6148

Email: sales@shinkyo-pb.com

編集室から

この原稿を執筆している時点ではまだですが、今号が発行される頃にはハロウィーンは終わっていることでしょう。今年はどのような祭になったのでしょうか。

ハロウィーンが済めばいよいよクリスマスです。今号がお手元に届くのは11月でしょうからまだ先のことかもしれませんが、キリスト教関連の書店や出版社は今が繁忙期のピークになります。

クリスマスは12月25日ですが、教会や学校、幼稚園・保育園等でクリスマス会を行う際は、大抵はクリスマスの前、12月に入った頃から行われます。そのための準備は当然さらに前から進められていて、早ければ夏頃からプレゼントを発注していたりします。それらの納品は全国各地のキリスト教系の書店が請け負うことが多く、そのため書店の皆さんはこの時期納品準備からお届けまで大変な思いをされています。キリスト教書を皆さまの手にお届けする役目を担ってくださる書店の皆さんの働きを、とりわけこの季節は覚えていただければと思います。

この繁忙期も12月に入ると次第に落ち着きます。何事もなければクリスマスや新年を静かに迎えられるはずです。

さて本誌「本のひろば」も次号は２０２４年1月号です。これまで装丁家の故・桂川潤氏デザインの表紙を氏のご逝去の後も使わせていただいていましたが、次の新年号より新しいデザインにしてイメージを刷新いたします。どうぞお楽しみに！　また桂川潤氏のこれまでのお働きにも改めて感謝を申し上げます。

（村上）

予告

本のひろば

2024年1月号

本・批評と紹介

（巻頭エッセイ）吉田亮（書評）B・W・アンダーソン著『旧約聖書』、晴佐久昌英著『贈りもの』、金子晴勇著『キリスト教思想史の諸時代 別巻1』、渡辺正男他共著『夕暮れに、なお光あり。』、コンラート・シュミート著『旧約聖書神学』、大貫隆著『原始キリスト教の「贖罪信仰」の起源と変容』、H・ナウエン、W・ガフニー著『老い』他

〔縮刷版〕旧約新約 聖書大事典

旧約新約聖書大事典編集委員会 編

図版・地図・写真500点、年表40頁を収録

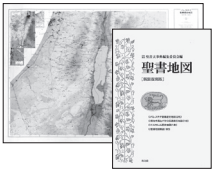
1989年に発売され好評を博した大事典が、手に取りやすい縮刷版で待望の復刊！

●A5判・上製・1456頁・定価29、700円

〈早期購入特典〉
『〔縮刷版〕旧約新約聖書大事典』の帯にある応募券をハガキに貼り、ご応募いただいた方全員に、『〔新装復刻版〕聖書地図』を1部プレゼント！
【応募締切：2024年4月末（消印有効）】

〔新装復刻版〕聖書地図

旧約新約聖書大事典編集委員会 編



『旧約新約聖書大事典』（1989年発売）に付録として添付され、後に別売された大判の歴史地図を復刻！

【内容詳細】パレスチナ聖書歴史地図（2枚）、東地中海とパウロ伝道旅行地図（1枚）、エルサレム歴史地図（1枚）、聖書地名解説・索引

●B5判・定価3、740円

主イエスの十字架による「平和の福音」を告げる！

キリストこそわれらの平和

エフェソの信徒への手紙講解説教

近藤勝彦 著

弱体化していると見られるキリスト教会を、神の絶大な力によって強くし、世にある戦いの中で愛と平和に生かす、慰めと励ましのメッセージ。

●B6判・並製・242頁・定価2、200円

光と祈りの礼拝堂

田淵 諭 著

30の教会の美麗な写真とともに手描きスケッチや建築プラン、旅のエッセイをまとめた、現代日本の教会建築第一人者による40年におよぶ活動の集大成。

●B5判変型・並製・320頁・定価3、960円

アメリカ聖公会の歴史

ロバート・W・プリチャード 著
西原廉太 監訳
中原康貴 訳

揺れ動き続けるアメリカにおいて、聖公会は社会的な出来事とどのように対峙してきたのか。一六世紀から現代までの教会の姿を、米国人司祭が詳細に描く通史。

●A5判・並製・500頁・定価5、720円

教文館 〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1
電話 03-3561-5549（出版部直通）《呈・図書目録》
キリスト教の書籍やCD、グッズのご注文は〈e-shop 教文館〉http://shop-kyobunkwan.com/ まで！

本のひろば　第七九二号　二〇二三年一二月号
一九五七年七月一七日　第三種郵便物認可
二〇二三年一二月一日発行（毎月一回一日発行）

新教出版社　〒162-0814 東京都新宿区新小川町 9-1　Tel: 03-3260-6148 / Fax: 03-3260-6198
HP：http://www.shinkyo-pb.com, email：eigyo@shinkyo-pb.com

イザヤ書註解Ⅰ　1—10章

ジャン・カルヴァン著／堀江知己訳

ルヴァン初の旧約註解。ヘブライ語の深い知識に基づいて、真剣に預言書に取り組む改革者の肉声。邦訳全5巻。1551年に出版されたカ

◆A5判・定価6820円

内村鑑三　闘いの軌跡

関口安義著

内村の激動の生涯を実証的な調査に徹して描き、新たな内村像を提示した評伝大作。著者の遺作。

◆A5判・定価7975円

不安という相棒

四つのタイプとどう付き合えばよいか

フリッツ・リーマン著／赤坂桃子訳

えてくる不安の諸相とその克服の方途。精神分析から鮮やかに見

◆四六判・定価2970円

世界水準の注解書！

牧会書簡

現代新約注解全書

辻　学著（広島大学教授）

第一テモテ・第二テモテ・テトスはパウロの名を借りた偽名書簡である。初代教会の実像を映すこの3書簡を徹底的に読み解いた邦語で類書に乏しい貴重な労作。『福音と世界』の70回にわたる連載に加筆し、堂々完成。

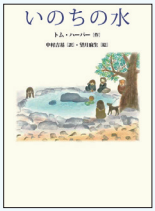
◆A5判・定価9900円

復刊しました！

いのちの水

［作］T. ハーパー　［絵］望月麻生
［訳］中村吉喜

もともと誰もが飲めた湧き水なのに、壮麗な壁や厳格な規則ができ、いつの間にか閉鎖的な礼拝堂になった悲しい泉の物語。◆B6判・定価1650円



2024年 渡邊禎雄版画カレンダー　発売中

「よきサマリア人」のたとえを美しい黄色地の上で描いた1984年の傑作。1枚もの。キリスト教書店にご注文下さい。

◆定価660円

発行所　〒162-0814　東京都新宿区新小川町九—一　一般財団法人キリスト教文書センター
電話〇三—三二六〇—六五二〇　振替〇〇一七〇—五—一一六七九
発行人　金子和人　編集人　村上信児　印刷所　モリモト印刷㈱
発売所　日本キリスト教書販売株式会社　電話〇三—三二六〇—五六七〇
定価七八円（税抜七一円）（〒63円）
一年分一三〇〇円（送料共）

本のひろば.com